

社説

Editorials

声

Voice

2024・4・4

なごや平和の日 議会を動かした若い力

名古屋市議会が、市提案の「なごや平和の日」条例を全会一致で可決した。1945年に国宝だった名古屋城天守が米軍空襲で焼失した5月14日を平和の日とする。犠牲者を悼み、惨禍を語り継ぐ。

少なくとも全国18都府県市町に同様の条例がある。74年の沖縄県が最初で、東京都も9年に定めた。最近が目立った空襲被害のない岐阜県高山市や東京都国立市なども続く。

名古屋市は空襲犠牲者は、都市では全国5番目に多い約8千人。多くの遺族が健在だった時期にできなかったのか、とも思う。ただ名古屋市では特記すべきことがあった。条例化を終始働きかけたのは、高校生たちなのだ。

2014年、野球の強豪校で知られる市内の私立東邦高の生徒会が市に要望書を出した。前身の商業学校生徒職員20人が戦争中、動員先の軍需

工場で空襲により死亡した。工場は戦闘機エンジンを製作しており、米軍に狙われた。校内で毎年、慰霊行事があるが、「市全体で取り組むべきではないですか」。

活動は引き継がれ、18年度には他校の生徒会からも賛同を集め、市議会に請願した。だが「空襲が63回もあり、特定の日を選びにくい」として採択できなかった。それでも記録をまとめ、校外にも出かけ発信し続けた。

目にとめたのが、祖母を空襲で失った河村たかし市長だ。空襲で負傷した民間の障害者への見舞金制度を独自に続けている。昨春、戦争の時代を知る自民党の長老議員の質問に、意欲を表明した。

検討過程の高校生ら100人の集会では大人の参加者が「被害者の観点だけでいいのか」と指摘した。戦争がなぜ起きたのか考えるべきだとい

う意見だ。高校生からは「歴史の授業でなぜ戦争の時代をしっかりと取り上げないんでしようか」との質問も出た。

広島市から転入してきた高校生が自分が受けた平和教育を紹介し、「名古屋はなぜないの」と話したことも、東邦の同級生を刺激している。

この運動を通じ、若者たちの社会を見る目は「ぶん鍛えられただろう。」高校生に「応えなきゃ」。多くの大人も叱咤されたとの思いを話す。若者の議論を深めるには、大人はあえて支える側に回る姿勢も時には必要ではないか。

5月にはバンテリンドームナゴヤのプロ野球公式戦で黙禱や展示を行う予定。「にぎやかな場所だからこそ訴えたら」という高校生の提案が元だ。この地に戦中あった工場は、まさに東邦の先輩が命を落とした場所だ。平和のバトンを次世代に引き継ぎたい。